

# 「サイクル学習」で授業と家庭学習の質を高める

## 宮城県 登米市立東和中学校

予習課題、レディネス課題、復習課題——。登米市立東和中学校は、全学年、授業で毎回出す課題のねらいを明確化。授業と連動した宿題を出し、授業と家庭学習のサイクルを回すことによって、生徒の学習意欲を高めようとしている。

### 学校と生徒の様子、課題

#### 小規模校での「授業力向上」が課題

宮城県北部に位置する東和中学校は、校区の約80%を山林が占める。かつては林業が主要産業だったが、現在は兼業農家の家庭が多い。生徒数は10年前に比べてほぼ半減し、今は1学年2学級の小規模校だ。

同校に対する地域の関心は極めて高い。特に部活動に熱心で、保護者の強力な支援を受け、アーチェリー部が全国優勝した他、ソフトテニス部は県トップレベルの強豪だ。

一方、学習面では課題があった。全国や県

の学力と比較すると、登米市全体の平均はやや低かった。詳しく分析した結果、子どもの家庭学習時間の平均が、全国や県の平均よりも少ないことが判明した。そこで、市は2009年度から学力向上策の中に「家庭学習の定着」を位置付け、具体策として、授業と家庭学習を連動させる取り組みである「登米っ子学習」を市立の全小・中学校で実践することに決めた。東和中学校はその研究指定を受けた。

同校では「宿題を出す」という指導が定着していなかったため、「サイクル学習」で授業との関連を重視した課題を宿題にして、生徒が家庭学習に取り組む必然性をつくること

をねらいとした。

「サイクル学習」導入のねらいは、授業の質を高めることにもある。同校は小規模校のため、教師は全員で12人、9教科のうち6教科は教科担任が1人ずつしかない。そのため、教師が授業力を高めにくい状況にあった。08年度に赴任した吉沢真介校長はそうした課題を目的に、教科を超えた教師全員の参加による校内授業研究会を増やした。当初、教師は他教科の担当と意見交換をするのに消極的だったが、授業と家庭学習を連携させる「サイクル学習」を全校挙げて実践し、それを起爆剤として、教師のこうした状況を打破することを目指すことにしたのだ。

### School Data

◎1976(昭和51)年開校。少人数グループで模擬会社を設立・経営する起業学習や、90以上に及ぶ職業講座などによるキャリア教育に力を入れる。



校長◎吉沢真介先生

生徒数◎174人 学級数◎11学級(うち特別支援学級5)

所在地◎〒987-0902 宮城県登米市東和町米谷字細野35

TEL◎0220-53-2002

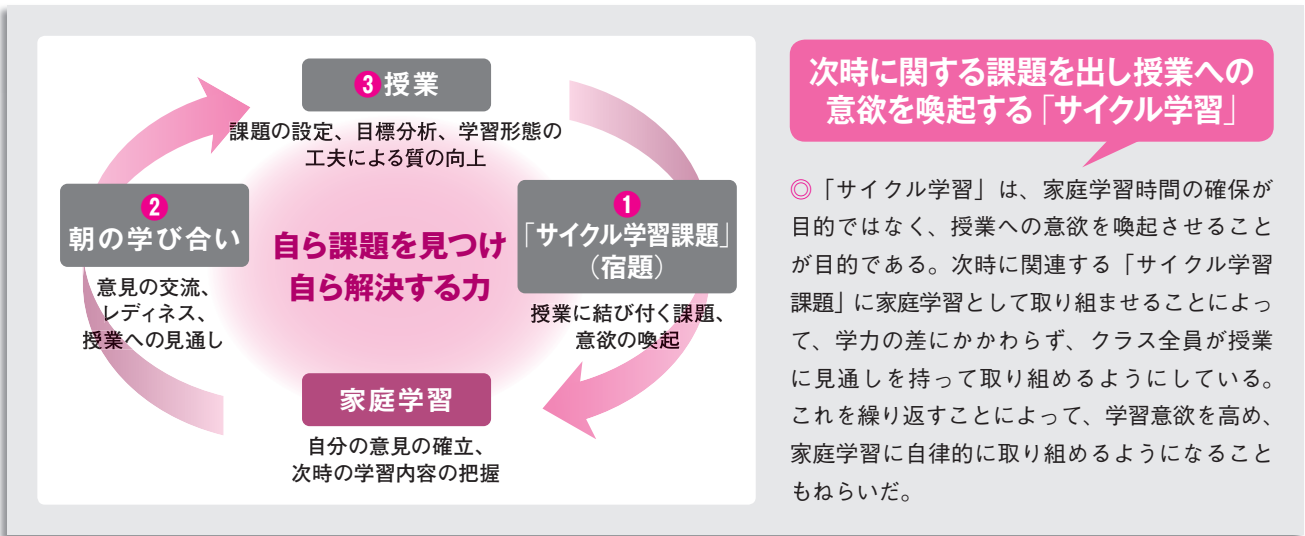
URL◎<http://www.tome-svr.jp/~touwa-chu/html/>

公開研究会◎未定

「学力保障」のために、移行期間の今できること

第4回

## 意欲を引き出す「家庭学習」指導



### 次時に関する課題を出し授業への意欲を喚起する「サイクル学習」

◎「サイクル学習」は、家庭学習時間の確保が目的ではなく、授業への意欲を喚起させることが目的である。次時に関連する「サイクル学習課題」に家庭学習として取り組ませることによって、学力の差にかかわらず、クラス全員が授業に見通しを持って取り組めるようにしている。これを繰り返すことによって、学習意欲を高め、家庭学習に自律的に取り組めるようになることもねらいだ。

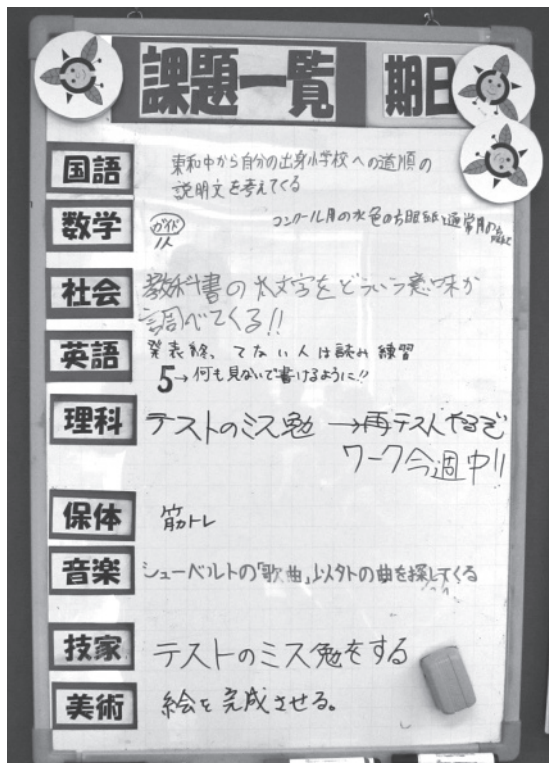


写真 黒板の横にあるホワイトボードに、「サイクル学習課題」がまとめて書かれている。各教科15分程度で終わる量が目安

「生徒たちの思考力や活用する力を伸ばすためには、実技教科の宿題も欠かせません。授業と家庭学習がつながっていることを生徒たちに実感させるために、すべての教科で毎授業、『サイクル学習課題』を出しています」

② 火曜日から金曜日は、朝15分間の「朝の学び合い」の時間を、生徒のレディネスをそろえる。次時の授業への興味・関心を維持すると共に、次時の生徒のレディネスをそろえる。

③ 授業では、課題解決型の指導を心掛ける。研究主任の佐々木貴子先生は、全教科において「サイクル学習課題」を課す理由を次のように話す。

① 「サイクル学習課題」(宿題)を、原則として全学年、全教科の授業で毎時間出し、次時の授業への興味・関心を維持すると共に、次時の生徒のレディネスをそろえる。具体的な方法は次の3点である。

「サイクル学習」は、授業→「サイクル学習課題」(宿題)による家庭学習→「朝の学び合い」↓次の授業、という順で行うのが基本となる。同校の「サイクル学習」の実践を通じた目標は「わかってできる生徒の育成」だ。具体的な方法は次の3点である。

### 概要 全学年、全教科で 毎回宿題を課す

### 取り組みのポイント



登米市立東和中学校  
研究主任、国語科担当。「常に生徒に伝えていくことは、『今はただ、可能性のみ追求せよ!』」



登米市立東和中学校校長  
吉沢真介 Yoshizawa Shinsuke  
「いつ何時、どんな生徒の前に出ても、授業を成立させられる教師でありたい」

## ◎「サイクル学習課題」の内容 年間指導計画に 日々の課題内容を盛り込む

「サイクル学習」の最大の特徴は、授業と家庭学習を関連付け、ねらいを明確にした課題を出していることである。すべての教科で毎回課題を出すといっても、授業中に終わらなかつた問題を課題にするような、その場しのぎの出し方はしない。次の三つのうちのいずれかの意図を「サイクル学習課題」に持たせるよう、教師は意識して課している。

- ① 予習課題—次時で学習する内容に興味・関心を抱かせる。または、自ら課題を発見させ、解決しようとする意欲を喚起する。
- ② レディネス課題—次時の学習のねらいを達成するために必要な既習事項を確認する。
- ③ 復習課題—習得した知識・技能の確実な定着を図り、次時に行くテストに備える。

この三つをどのように使い分けているのだろうか。佐々木先生は、「単元の導入部分では予習型の課題を、単元の最後のまとめでは復習型の課題を中心に出題するというように、教師一人ひとりが授業に合わせて考えています」と話す。

佐々木先生の担当教科である国語の場合、

単元の導入部分では漢字練習や意味調べを課題にすることが多い。他には、題材の内容に

対する興味を引き出すような予習型の課題を

出すこともある。単元の最後のまとめでは復習型の課題を出すことが多く、週末を挟んで取り組ませることもある。

予習型の課題を出す目的を、佐々木先生は次のように説明する。

「予習をすると授業で新たな発見や刺激が損なわれてしまうという意見もありますが、それは間違いだと思います。次の授業の学習内容への関心が低ければ、授業で獲得できる刺激も少ないのです」

「サイクル学習課題」の研究の初年度だった09年度の1年間、どの教師もいつどのような課題を出したかを記録してきた。この積み重ねを生かして、10年度の年間指導計画には「サイクル学習」をあらかじめ組み込んでいく。

「『サイクル学習課題』の出し方は、授業の組み立て方に大きくかわります。1年間、研究を積み重ねてきたとはいえ、課題の出し方が成功することより、『別の課題の方が良かったのでは』と反省することがまだまだ多いのが現状です」（佐々木先生）

## ◎「朝の学び合い」 家で課題が出来なかつた生徒も 自信を持って授業に臨める

二つめの特徴は、「サイクル学習課題」と授業との間に行う「朝の学び合い」にある。

「朝の学び合い」では、まず4人1組の班

でその日の「サイクル学習課題」に取り組んできたかどうかを確認する。加えて、教科担任が話し合うように指示しておいた課題について、生徒同士で意見を交換する。課題が分かつた生徒が分からなかつた生徒に教えた、他の生徒の考えを聞いて「なるほど」と思った部分をノートに書き込んだりする。

佐々木先生は「朝の学び合い」を次のように評価する。

「分からなくて出来なかつた生徒に、出来た生徒が教えるという学び合いが生まれたのは、大きな成果でした。課題が出来なかつた生徒も『こういうことなんだ』とある程度理解した上で授業に臨めるようになりました。学力が低い生徒が、以前より自信を持って授業に参加できるようになったのです」

10年度は、班単位による「学び合いファイナル」を導入した。課題のチェック表や話し合いの結果をノートにまとめていくものだ。学級担任が放課後などにチェックし、各班の状況を把握し、指導に生かしている。

多くの生徒が課題に取り組んでくるが、一部には忘れてくる生徒もいる。そうした生徒には、学級担任や教科担任が昼休みや放課後に粘り強く個別に指導している。

「小さい学校ですから、『A君は今日、課題をやってきていない』といった情報はすぐ耳に入ってきます。学級担任と教科担任が連携して、生徒に働き掛けています」（佐々木先生）

「学力保障」のために、移行期間の今できること

第4回

# 意欲を引き出す「家庭学習」指導

図 「サイクル学習課題（宿題）」とリンクした授業例（2年生数学・伊澤ゆかり先生）

単元	平行と合同（2時間目）	
到達目標	n角形の外角の和が分かる	
サイクル学習課題	<p>1. n角形の内角の和を求める公式は？ ← 復習課題</p> <p>2. (1) 八角形の内角の和を求めなさい ← 復習課題</p> <p>2. (2) 三角形の外角と内角の和を求めなさい ← レディネス課題</p>	
時間	学習内容・活動	指導上の留意点
<p>この日は「朝の学び合い」の時間が取れなかったため、チャイムが鳴る前に互いに「サイクル学習課題」に取り組んできたかを確認させた</p>		
導入	<p>◎復習課題の答え合わせ</p> <p>◎近くの席の生徒同士がお互いの解答を見せ合って答え合わせ</p> <p><b>1. n角形の内角の和を求める公式は？</b></p> <p>・前時の授業での既習事項の確認問題。生徒たちに答えさせる (答え) <math>180^\circ \times (n-2)</math></p> <p><b>2. (1) 八角形の内角の和を求めなさい</b></p> <p>・前回の授業の既習事項の確認問題。生徒たちに答えさせる (答え) <math>180^\circ \times (8-2) = 180^\circ \times 6 = 1080^\circ</math></p> <p>次の課題は「外角と内角の和」という既習事項を組み合わせて考える課題であることを説明 三角形の外角とはどこかを生徒に問い掛け、生徒に外角を記入させる</p> <p><b>2. (2) 三角形の外角と内角の和を求めなさい</b></p> <p>・レディネス課題の答えを生徒たちに発表させる</p> <p>・生徒から <math>520^\circ</math>、<math>360^\circ</math>、<math>540^\circ</math> の3つの予想が出た</p> <p>・一箇所の外角と内角の和が <math>180^\circ</math>。三角形ではそれが3つあるから <math>540^\circ</math> であることを解説 (答え) <math>540^\circ</math></p>	<p>「正解を聞いているのではありません。予想でいいからどんどん発表してください」と繰り返し言い、生徒の多様な考えを引き出すように工夫</p> <p>レディネス課題では、正解を出すことより自分で考えることを大切にしようにと声を掛ける</p>
展開	<p>◎三角形の外角と内角の和の出し方を踏まえて、多角形の外角の和の授業を展開</p> <p>・4人1組の班での「学び合い」を中心に、好きな多角形の外角と内角の和を計算させる</p> <p>・多角形の外角の和は (外角と内角の和) - (内角の和) であることを用いて、「十二角形」や「二十角形」などのさまざまな多角形の外角の和を、生徒たちが黒板に出て発表</p> <p>・すべて <math>360^\circ</math> になった</p> <p style="text-align: right;">4人1組の班で向かい合って相談し合う「学び合い」の時間を設定</p>	
まとめ	<p>◎多角形の外角の和は <math>360^\circ</math> であることを確認</p> <p>◎次の授業の「サイクル学習課題」を提示</p> <p>サイクル学習課題</p> <p>①正八角形の1つの外角の大きさを求めなさい ← 復習課題</p> <p>②1つの外角が <math>30^\circ</math> である正多角形は何角形ですか ← 復習課題</p>	

**伊澤先生のコメント** 「サイクル学習課題」を取り入れることによってレディネスが高まり、授業では学び合いや新たな問題に挑戦する時間を確保できるようになりました。

## ◎ 校内研修体制の改革

### ワークショップ形式で 誰もが発言できる環境をつくる

校内授業研究会の方法を、「サイクル学習」の導入を契機にワークショップ形式に変えた。

教師全員を三つのグループに分け、テーマに沿って討議した後、グループの代表が発表する。グループの分け方はその都度変えており、時には抽選ということもある。ワークショップの進行役となるファシリテーターや記録係といった役割分担も、その場の抽選などで決めることが多い。特定の教師だけが発言する状況避けるため、グループも役割を固定化せずに、誰もが発言できる環境にしている。

「ワークショップで取り上げる内容は研究主任が調整しますが、焦点化する切り口はその時のファシリテーターによっても違います。授業のねらいを達成できたかどうかという視点だけは外さないようにし、必ず話し合いの軸にしています」（吉沢校長）

## 成果、今後の課題

### 次に何を学ぶのかを意識 自主学習の内容が変わる

「サイクル学習」は始まって2年目となり、

生徒の学習の様子にも少しずつ変化が表れてきたと、佐々木先生は話す。

「ただ受け身で授業を聞いているのではなく、次の授業で何を勉強するのかを考え、主体的に学ぶ意識を持つ生徒が増えてきたと感じます」

目に見えて変わってきたのは、「自学ノート」への取り組み方だ。これは、「サイクル学習課題」とは別に、家庭学習として取り組む教科や内容を自分で選んで勉強し、毎日提出するノートである。以前は大きな字で漢字や英単語を書くだけの生徒が多かったが、「サイクル学習課題」を課すようになってから、授業内容を復習する生徒が増えた。

成果は数値にも表れている。家庭学習時間の調査では、「30分未満」「30分から1時間」の割合が減ってきている。

「授業でより多くのことを学ぶために、家庭学習が必要なのだということが、生徒に少しずつ浸透してきました。今後は、生徒自身が自分で学びの計画を立てられるような力を付けさせたいと考えています。その力は、高校や大学での学びにつながるからです。単にプリントを課すだけでなく、計画の立て方や勉強の仕方が身に付くための家庭学習指導が必要であり、そこまで深めていくのが今後の課題です」（佐々木先生）

教師も変わった。先を見通した授業づくりをするようになってきたのだ。

「家庭学習で何に取り組ませるかまでを考えて授業計画を立てるようになったのは、大きな変化です。次の授業で何をするかを明確にイメージできなければ、的確な課題は出せません。更に、授業の終わらせ方も変わりました。『時間がなかったからここまで』という中途半端な終わり方ではなく、授業のねらいを完結させるようになりました」（佐々木先生）

これまでの授業研究会では意見交換が活発でない面もあったが、「サイクル学習」を取り入れて、校内研修をワークショップ形式に切り替えたところ、すべての教師が積極的に発言するようになり、授業改善に意欲を持つ教師が増えてきた。研究を始めた当初は、研究主任、または指導主事らがファシリテーターを担っていたが、今ほどの教師もファシリテーターを務められるようになった。吉沢校長は今後の展望を次のように話す。

「教科指導力の向上が重要だと分かっているけども、教科担当が1教科につき1、2人しかない本校では研修にも限界があると思っていました。しかし、家庭学習をテーマにすることに、教科の壁を超えて教師たちが一緒に議論することができ、授業力を高めていくことは可能であると確信しました。取り組みの成果と課題を教師間で共有しながら、今後も授業力の向上を模索していきたいと思えます」

意欲を引き出す「家庭学習」指導

自校化の視点

「知識」から「見方・考え方」を問う  
課題設定への転換が鍵



東北大学大学院教育学研究科准教授  
登米市立東和中学校学力向上アドバイザー  
イサー  
谷口和也  
Taniguchi Kazuya

◎取り入れたい考え方  
多様な見方を生み出す課題で  
生徒全体の底上げが可能に

東和中学校の取り組みで優れている点は、家庭学習を「サイクル学習」に組み込み全校で行っていることと、「朝の学び合い」にあります。私が見学した授業では、生徒に疑問点を考えさせたり調べさせたりする課題を与えていました。生徒が多様な見方・考え方をもち寄った上で授業を展開することで驚きや発見が生まれ、授業がより深まっていました。「サイクル学習」は、家庭学習時間の確保が目的ではなく、家庭学習を通して授業に対する意欲を高めることが目的です。生徒が「さっきの授業、どう思った？」と休み時間に話題にしたり、「こんなものを見つけた」と自己学習したりと、「授業と授業の間」の学習を促すような工夫が必要です。

「学力下位層には知識定着の宿題以外は無理」とお考えの先生もいるでしょう。それは誤解です。知識の定着以上に「見方・考え方」を問う課題は、特に上位層と下位層に有効です。上位層にとっては自分の知識を自由に使いこなせるから面白いし、下位層にとっては知識以外で勝負できますから「自分も分かった」と授業に参加できる喜びを感じやすくなります。例えば、「教育問題」を考えてください。知識に差があっても教育学者も教師も保護者も同じ土俵で議論できます。これと同じです。「見方・考え方」を「サイクル学習」に取り入れることで、結果として下位層の生徒に知識習得への欲求が生まれるのです。

相対評価の時代には、生徒間の知識の差を利用した学習観が主流でした。しかし今は、解釈や表現の勝負となる絶対評価時代の学力向上策への転換が求められているのです。

◎取り組みを深める視点  
宿題・授業・テストの  
全体を見通した設計を

「サイクル学習」の充実のためには、次の

三つのサイクルを回すと良いでしょう。一つめは、授業と授業の間を家庭学習でつなぐサイクルを充実させること。二つめは、授業と定期テストのサイクルです。授業で考えたこと、体験したことがテストの得点に結び付けば、生徒の強い学習意欲につながります。逆に、授業に課題解決のための活動を積極的に取り入れても、テストで単に語句を答えさせるような出題をしているのは、生徒に「活動は遊びですよ」というメッセージを発しているのと同じです。

三つめは、定期テスト同士をつなぐサイクルです。定期テストの範囲が変わっても、テストの問題形式が同じでもつたない話です。例えば、1学期の中間テストは理由を表現させる形式、期末テストは比較させて表現させる形式など、1年間の見通しを持ってテストを設計すると、生徒の学習意欲がより高まるはずですよ。

まずは1学期分の宿題と授業と定期テストのサイクルを設計してみたいかがでしょうか。生徒に何を理解させ、何に驚いてもらうのか。ベテランの先生ならそれほど時間をかけずに出来ると思います。

たにぐち かずや 広島大学大学院教育学研究科博士課程修了。大学院生時代に公立中学校で非常勤講師を経験。岩手大教育学部助教授等を経て、現職。専門はカリキュラム論。数校の公立・私立中学・高校で授業やテストの開発に携わる。2009年から東和中学校の学力向上アドバイザー。